

戦後の折口信夫の「神学」が示唆する贈与の次元

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2020-11-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩野, 卓司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21234

戦後の折口信夫の「神学」が示唆する 贈与の次元

岩 野 卓 司

序

第二次大戦の後、折口信夫は敗戦は神の敗北であり、日本には新しい神学が必要であると考えていた。この神学は、日本でしか通用しない神道ではなく、普遍的な宗教としての神学である。そのために彼は記紀神話を読み直し、高皇産靈神タカミムスビノカミや神皇産靈神カミムスビノカミといった産靈ムスビの神に注目し、この神々を中核とした神学を構想する。さらに彼は、この構想から思索を深めて、もう神とも呼べないような存在を考えるまでに行きつく。こういった彼の神学や思索にはどういう重要性があるのだろうか。ここでは、他者性、贈与、神以前の存在の視点から考えていきたい。

1) 神道の限界

どうして日本は第二次世界大戦に敗れたのであろうか。精神主義の過度の偏重、戦略のない無謀な軍国主義など理由は多々あるだろう。そういった中で、折口はこの敗戦を「神の敗北¹⁾」と定義し、敗因に宗教的な理由を求めている。日本の神々が欧米のキリスト教の神に負けたのだ。もちろん、神に敗戦の責任を押しつけて、日本国民がまったく反省しなくてよいというわけではない。というのも、この敗北は神に仕える国民に責任があるからである。彼は次のように語っている。

神様が敗れたといふことは、我々が宗教的生活をせず、我々の行為が神に対する情熱を無視し、神を汚したから神の威力が発揮できなかつた、と言ふことになる²。

これはどういうことなのか。ここで前提になっているのは、日本における古代人の宗教的生活と近代人のそれとの比較である。明治以降、神道は国家の庇護の下で復活したが、逆に神道に政治という不純な要素が持ち込まれたり、褻のような神道の大切な儀式が簡略化され合理化されたりした。こういった不純な要素や簡略化の結果、近代の日本人は中世のヨーロッパの人々が十字軍に対してもっていた情熱も持ち合わすことができなかった。戦争においても戦災においても、宗教的な情熱は影を潜めていたのだ。明治になって国家神道が設立され、古代の信仰が再現されたかのような錯覚を与えるが、実際はこの神道によって古代の信仰の本来の姿はゆがめられ抑圧されていたのだ。だから、日本人は本来の意味での宗教的情熱を欠いており、そのため神々も力を発揮できなかったわけである。

それでは、どうすればいいのだろうか。折口は神道を普遍的な宗教とすべきであると考え。どうしてであろうか。ひとつには、神道それ自体宗教と呼ぶにふさわしくはないからである。というのも、キリスト教やイスラム教などの世界の宗教と比べて見れば分かるように、神道には「宗教体系³」や「理論神学⁴」というものがないのだ。折口が意識しているのは、特にキリスト教である。この宗教では、教義がきちんと整えられ、その上に神学が体系的に成立している。それに対し、神道にはそういった教義や体系は存在しないで、信仰や神話がただ羅列されているだけに過ぎない。神道は「未成立の宗教⁵」なのである。もうひとつは、神道が日本という枠を超え出ない大変ローカルな存在だということである。というのも、神道は「国民道徳⁶」と結びついてきたからである。さらには、神道の神は「祖先神⁷」と考えられてきた。日本の神々は日本民族の道徳と祖先崇拝にしばられていて、日本という

粹を出ることができなかったのだ。そういうわけなので、折口は神道も「民族教」から普遍的な宗教に脱皮しなければならないと考えるのだ。それはちょうどユダヤ教という民族の宗教がキリスト教という人類に普遍的な宗教に発展したのと同じである⁸。神道は日本というローカルな限界を超えていかなければならない。ここに神道再生の道がある、と彼は考えるのだ。

2) 産霊の神

この新しい神学の中核として、折口は造化三神、つまり天之御中主神、高皇産霊神、神皇産霊神に注目する。特に後の二つの神々を重視する⁹。これらの神々は古事記や日本書紀に登場し、天地の起源にかかわっている。古事記では次のように記されている。

天地初めて発くる時に、高高原に成りませる神の名は、天之御中主神。次に高御産巢日神。次に神産巢日神。此の三柱の神は、みな独神と成り坐まして、身を隠したまふ¹⁰。

天地開闢において、最初に現れるのはこれらの神々であり、その意味で彼らは神々や事物の起源に位置している。本居宣長も平田篤胤もすでにこれら最初の神々を重んじており¹¹、折口も彼らの国学の流れを汲みつつ、大変独創的な解釈をしている。彼は起源にまでさかのぼって現状を考え直そうとしているのである。これは彼の民俗学や国文学の研究の基本的な方法であるが、神道についても同じ態度がとられている。それでは、造化三神という起源を考えることで、何が見えてくるのだろうか。それは祖先神の発想の限界である。明治以来の国家神道は、天皇家の先祖としての天照大神を重んじるが、それ以前の起源について考えを前に進められない。だから、神の系譜と人間の系譜とを分離する必要があるのだ。折口は言う。「〔人間の〕系図にながつてゐる神と、それにつながらぬ神とを区別して考へねばならぬ。それ

によつて系図につながる神と、宗教上の神とが岐れて来る¹²⁾。人間とつながりをもつ神々ではなく、人間を超越した神々が新たな宗教には必要なのだ。ここでも、神人同形説を否定するキリスト教と同じように、折口は原初の神々から人間的なものを取り除き、祖先神の限界を乗り越えようとするのだ。

それでは、産霊の神とはどういうものだろうか。折口は次のように説明している。「字は、産むの『産』、たましひの『霊』で、魂を産むといふ風に宛てられてゐますが——、神自身の信仰はさうではなく、生きる力を持った体中へ、魂をば植ゑつける、或いは生命のない物質の中へ魂をば入れる¹³⁾」ことである。産霊と書いて「むすび」と読むのであるが、これは靈魂を生産することではなく、肉体や物質にむすびつけることなのである。彼は次のようにも述べている。「むすぶは靈魂を物に密着させることになる。靈魂をものの中に入れて、それが育つような術を行ふことだ。つまり、むすびの神は、それらの術を行ふ主たる神だ¹⁴⁾。」こういった術を施すことによって、「〔…〕魂が発育するとともに、それを容れてゐる物質が、だんだん育つてくる。物質も膨れて来る。魂も発育して来るといふ風に、両方とも成長して参ります。その一番完全なものが、神、それから人間となった。その不完全な、物質的な現れの、最も著しく、強力に示したものが、国土或は島だ、と古代人は考へました¹⁵⁾。」言い換えれば、ここで記されている神々、人間、大地、さらには山川草木、動物といった万物の起源は、産霊の神による「むすび」の術によるものなのだ。それらが、生きて成長できるのは、こういった魂の付与によるものなのである。「この神の力によつて生命が活動し、万物が出来て来る¹⁶⁾」のだ。彼は「神をつくる神¹⁷⁾」とも呼んでいる。産霊の神は、ふつうの神に先立つ神であり、神よりも根源的な何かを彼は直観していたのではないのだろうか¹⁸⁾。この神は、ふつう神と呼ばれるものよりもさらに根源的な存在なのである。

3) 他者性

ところが、日本人はこの神々を「祖先神」と考えがちである。事実、高皇産靈神の子孫とされている神々や氏々が多い。これが神道が依然としてローカルなままで、普遍的な宗教にならない理由である。折口は次のように言う。「高御産巢日神・神産巢日神も祖先神として記録しているが、この二神はどう考へても祖先神ではない。昔から日本人は、偉い神々を祖先神として考へやすかつたのだ¹⁹。」産靈の神は、あらゆる「生命の根源」であり、その意味で万物の祖先とも言える。しかし、それは決して人間の系譜的起源としての神ではない。こういった一種の人間主義的解釈を折口は禁じるのだ。そして、この神は人間のみならず、万物をも超え出た存在である。「その神は天地の外に分離して、超越して表れてゐるのだ²⁰。」折口はここで超越神を考えている。産靈の神は、天、地、神々、人間などに生命を与えるが、それらを超えてた異質な存在なのだ。ここに産靈の二神の他者性を読み取ることができるのではないのだろうか²¹。

この他者性の発想は、彼の師である柳田国男への批判と彼がそれまで考えてきたマレピトの考えとが関わっている。柳田は死んだ先祖が神になるという「祖先神」の考えを展開してきた²²。それに対して折口は、神は他所から来訪するものであると考える。「まれびととは古くは、神を斥す語であつて、とこよから時を定めて来り訪ふことがあると思はれて居た²³」のである。マレピトは永遠の樂園である「常世の国^{トヨコ}²⁴」に住み、そこから我々の世界に訪れるのであるが、「常世」は他界である。マレピトは他界からこの世に恵みをもたらしにやってくるのである。産靈の神が他界の支配者であるかどうかは置くとしても、他界の住人である²⁵。この点で、産靈の神は根本の次元でのマレピトに通じるのではないだろうか。ここに祖先神とは異なる他者としての神の姿がある。こういった考えから、折口は大胆な仮説を立てている。宮廷の祖先神である天照大神は、実は高皇産靈神に仕える「巫女」であり、

それが長い伝承の間に変わってしまったという説である。高皇産霊神は天照大神の「相談相手」だったのであり、常にその「陰に隠れている」。そして、ここから天照大神が「神の後」だという考えを導き、さらに神に仕える「巫女」であったという説に至るのだ。産霊の神は常に隠れている他者としての神であり、祖先神はこの神に仕える者に過ぎないわけである²⁶。

4) 贈与

根源的な神である産霊の神の聖なる術は、肉体や物質に魂を結びつけることにあった。だから「産霊」は「むすび」なのだ。先ほど引用したように、折口は「むすぶ」を肉体や物質に魂を「植ゑつける」、「入れる」、「密着させる」と言い換えていた。さらに彼は靈魂を「与へる」とも表現している。「靈魂を与へるとともに、肉体と靈魂との間に、生命を生じさせる、さういふ力を持った神の信仰²⁷」。「われわれの神話の上では、われわれの住んでゐる此土地も、われわれの眺める山川草木も、総て此神が、それぞれ、適当な靈魂を附与したのが發育して来て、国土として生き、草木として生き、山川として成長して来た²⁸」。「此神には、生産の根本条件たる靈魂附与——むすびという古語に相当する——の力を考へてゐるのである²⁹」。このように折口は、「むすぶ」ことを贈与と解釈している。「植ゑつける」、「入れる」、「密着させる」も、贈与を具体的なイメージで述べたものであろう。折口によれば、生産という事柄を根本的に考えれば、それは贈与に他ならない。神が物質や肉体に魂を贈与することによって、万物が生きることができ、生成することができるようになるのだ。この点で、キリスト教とはちがひ、折口神学にもアニミズム的なものが強い。万物が魂をもち生きることができるのだ。産霊の神々は異次元にある超越的な存在であるが、この異次元からの贈与が万物の生命をつくるのである。

それでは、産霊を贈与と考える解釈にはどういう意義があるのだろうか。それは記紀神話にふつうに述べられている「なる」や「うむ」とは異なる次

元を発見したことではないのだろうか。例えば、丸山眞男によれば、産霊の神は生成増殖の象徴である。彼はこう述べている。「ムスビのムスは苔ムスのムスであり、ヒが霊力を表現する。この生長・生成の霊力の発動と顕現（隠→現）を通じて、泥・土・植物の芽など国土の構成要素および男女の身体の一部が次々と成って、イザナキ・イザナミの出現で一段落する³⁰。」この生成のあとで、イザナギとイザナミが性交して「国土」や「神々」が誕生し、「うむ」の論理がそこにはみられるが、火神を「うむ」ことでイザナミが死ぬ過程やそのあとで嘔吐物・尿、火神の死体、イザナギの涙や刀などから神々が自然発生する。再び「なる」の論理が支配的となる。キリスト教の考え方では、世界創世神話は「うむ」は「つくる」に引き付けられるが、日本では「うむ」は「なる」のほうに引き付けられてしまう、というのが丸山の結論である³¹。産霊による「なる」は広く日本文化を支配しているのである。たしかに、通常の解釈に即せば、産霊の神は生成増殖と深く結びついていると言えるだろう。しかし、折口の主張するように、そこに贈与の契機を入れて解釈し直したらどうであろうか。神々、人間などの万物の生成増殖もこの贈与がなければ、生じないであろうし、性行為による生殖もこの贈与があってはじめて可能になると言えるであろう。「うむ」と「なる」の起源は、この贈与にあるのではないのだろうか。産霊において、生産と生成は根源的な贈与の成果なのだ。折口は、「うむ」と「なる」とは次元の異なる「与える」を考えて行こうとしたのではないのだろうか。

5) 神以前の存在

だが、折口が産霊の神を通して思索していたものは、しだいに記紀神話の伝承のなかの産霊の神の記述に収まらなくなってくる。新しい神学をめぐる彼の考えが深まっていく様がそこに読み取れる。古事記や日本書紀などの文献の解釈、比較宗教学の視点、民俗学の体験や知識に基づいた想像が、そこではせめぎあっているのだ。彼は次のように述べている。

わが国の神界についての伝承は、其から派生した神、其よりも遅れた神を最初に近い時期に遡上させて、神々の伝へを整理した為に、此神の性格も単純に断片化したものと思はれる。だから、創造神でないまでも、至上神である所の元の神の性質が、完全に伝つてゐないのである³²。

ユダヤ教やキリスト教の神と違い、日本の神々が創造神ではないことに折口が口惜しく思っているのは、言葉の端々からも伺える。彼が重視した産霊の神も生命や魂を植えつける神なのであるが、創造神ではない。しかし、不満をもっているとはいえ、彼は無理やり創造神を日本の神道に求めることはしない。創造神の問題は括弧に入れておいて、日本の文脈に沿いながら、「至上神」あるいは「元の神」を考えていこうとするのだ。折口の思考の特徴は、常に起源に遡ろうとすることにある。彼は原初にある最高の神を考えようとするのだ。それは天皇家の先祖としての天照大神でもなければ、戦後に彼が新しい神学の中核に据えようとした産霊の神でもない。それらの伝承は後の派生的な神の性格を起源の神に読みこんでいるのであり、そのせいで起源の神それ自体はよく分からなくなってしまっているのである。記紀の伝承では「元の神」の本来の姿は失われているのだ。

至高な「元の神」は、もはや神と呼べるかどうか分からないぐらい根源的である。神の起源とはそういう事態に他ならない。折口は神という名称にもこだわらなくなっている。偽ディオニシウスやエックハルトのようなキリスト教神秘神学者たちは、根源的な神を求めて神という名辞をも捨て去ったが、それと同じように折口も根源的な神を「神のない有様」とか「神以外或は神以前の有様³³」とも言っているし、さらには端的に「既存者」とも呼んでいる。ただ、「至高神」や「元の神」と呼んでいる箇所もあり、折口の思考が揺れ動いているのがここでも感じられる。だがむしろ、ふつうの神という次元には留まることのできない深みに彼が到達していることを、私は強調

したい。

我々は、神に就いて、知り過ぎたとは言へないが、神だけでは、解釈しきれぬ所まで到達してゐる。我々の持つ神以前の——昔の人の総べての運命を任せて考へてみた——存在を考へねばならなくなつて来てゐる³⁴。

それでは、神以前のこの根源的な存在の視点から見ると、記紀の伝承のどこに問題があるのだろうか。何が失われているのだろうか。折口は次のように語っている。

恐らく天上から人間を見瞻り、悪に対して罰を降すこともあつたのであらうと思ふ。ところが、天御中主・高皇産霊・神皇産霊の神々には、さうした伝へが欠けてゐる。此は其点が、喪失したものと見てよい。人間にとって、利益でない神の感覚を迷惑だと思つた人々は、そう言ふ知能を持つ神を、悪神と思ふやうになつた³⁵。

記紀の原初の神々の描写から抜け落ちている一番重要なものは、悪への処罰という面なのだ。フロイトにならって言えば、人間の無意識は不快なものを遠ざけ忘却していく傾向があるが、折口の解釈もそれと軌を一にしている。原初の処罰というネガティブなものは記紀の伝承のなかで無意識のうちに遠ざけられていったのだ。ただ、「至上神」や「既存者」の痕跡はこれらの伝承の端々にあらわれている。例えば、彼はこう言う。「所謂造化三神は、創造神らしい資格を伝えてゐぬが、『天御中主』の名から見ても、至上神・既存者としての素朴な考へを持つて見てゐたことが察せられる³⁶。」また、「至上神の威力」や「至上神とした所の意図」が、造化三神の記述とは必ずしも関係なく見いだされたりもするとも述べている³⁷。記紀には断片のうち

に「至上神」である「既存者」への方向性が見いだせるのだ。

そして、この「既存者」は罰を与える根源的な存在である。それは罰を贈与する存在なのだ。彼はこう書いている。

個人生活に就いて、まだ深く考へてみなかった時代に、既に営んでゐた団体生活を、思ひがけなく、人々が破る事が度々あつた。其時、神とも思はれ、神以前とも言ふべき——恐らくは神以前の——存在が、我々を罰する³⁸。

これが「既存者」による罰である。「既存者」が部落全体に「大雨・豪雨・洪水・落雷・降雹³⁹」などをもたらし罰するのである。これは日本人に原罪に認める発想である。ここから生じるのが、「天つ罪」と「国つ罪」である。前者は、素戔嗚尊が犯した罪で田畑にかかわるものである。後者は、人を傷つけることや近親相姦のような、神が嫌う罪障である。そして、これらの原罪に罰を与える「既存者」という点で、日本の「元の神」もキリスト教のエホバや中国の天帝に伍することができるのだ。というのも、これらの神たちはどれも罰を与える存在だと折口は考えるからである⁴⁰。「既存者」としての性格を有することで、日本の根源的な神は、たとえ創造神でなくても、世界で通用する存在になっている、と彼は考えたのではないだろうか。「既存者」についての思索を通して、彼はそれまで神道がもっていた弱点である罪障観念の不在を克服したと言えるであろう。日本が戦争に負けたのも、日本人がどんな罪を犯しても罰しない円満な神を勝手に考えてきたからであった⁴¹。罰を与える「既存者」は、日本人が自分に近しく考えてきた神々よりはるかに根源的な他者性を示しているのだ。

そして、私がここで強調したいのは、産霊の神が魂を贈与する神であるのに対し、「既存者」は罰を贈与する存在だということである。折口が日本の神を考えるにあたって、贈与は最も重要な役割をもっているのではないの

か。魂や生を与える産霊の神と、罰することで死と恐怖を与える既存者とが結びつくことによって、折口の神学は生と死、愛と罰、結合と破壊といった根源的な二面を備えた存在を考えることができたのだ。「既存者」が造化三神であるのか、さらにはそのなかでも天之御中主神であるかどうかは最終的には定かではない。しかし、造化三神をめぐる記紀の記述が忘却しながらも示唆している根源的なものは、死の贈与に他ならない。この贈与こそ、生の贈与に連動するか、あるいはその背後に潜む根本の贈与なのである。

結論

折口が新しい神学において考えていたのは、贈与の次元である。高皇産霊神や神皇産霊神は万物に魂を贈与することで生命を宿らせ生成し成長させるのだ。これらの神は通常の神々とは異なり、神々に先立ち、また神々をも生み出す根源的な神に他ならない。また、この二神はマレピトと類似しており、祖先神とは違う異質な他者であり、異次元に位置している。彼らのむすびの術は、キリスト教の神の創造とは異なるかもしれない。しかし、ただの生成増殖とは違う根源的な贈与を考えることで、これまでの神道とは異なる宗教的な可能性を折口は見つけたのではないのだろうか。しかも、彼の思索はそれだけに留まらない。さらに根源的な「既存者」を考えていこうとする。それは記紀の記述が忘却しているものの、そこに断片的に記されているものである。これはもはや神とも呼べない存在の次元であるが、この存在も贈与によって特色づけられている。というのも、それは罰を与える贈与だからである。彼は魂や生を与える贈与だけでは収まらない、罰を与える根源的な贈与、死の贈与を発見したのだ。

《注》

- 1 「神道宗教化の意義」、『折口信夫全集 20』、中央公論社、1996年、291頁。
- 2 同。
- 3 「神道の友人よ」、『折口信夫全集 20』、中央公論社、1996年、275頁。
- 4 「神道宗教化の意義」、前掲、298頁。
- 5 「神道の友人よ」、前掲、275頁。
- 6 「民族教より人類教へ」、『折口信夫全集 20』、中央公論社、1996年、284頁。
- 7 「神道宗教化の意義」、前掲、301頁。
- 8 「民族教より人類教へ」、前掲、282頁。
- 9 天之御中主神は何をしているのかよくわからない神である。河合隼雄によれば、日本の神話には三人神がいる場合ならずひとり無為な神が登場する(河合隼雄『神話と日本人の心』、岩波現代文庫、2016年、43頁)。実際、河合の言うように、天之御中主神は現れてもすぐに消えてしまうし、その後も登場しない。しかも、何の業績もない。ここから河合は、日本神話の「中空均衡構造」という説を主張する。「日本神話の構造の特徴は、中心に無為の神が存在し、その他の神々は部分的な対立や葛藤を互いに感じ合いつつも、調和的な全体性を形成しているということである」(同、329頁)。産霊の二神が働きながら、天之御中主神は無為の中心として全体の調整をはかっているのだ。それに対して折口は、新しい神学をつくるために、産霊の二神のみを中軸に置こうとしている。「神道教は要するに、この高皇産霊神・神皇産霊神を中心とした宗教心の筋目の上に、更に考えを進めて行かなければなりません」(『神道の新しい方向』、『折口信夫全集 20』、中央公論社、1996年、313頁)。
- 10 『古事記』、角川ソフィア文庫、2009年、23頁。
- 11 『本居宣長全集 第9巻』、筑摩書房、1968年、121-133頁。平田篤胤『例の真柱』、岩波文庫、20-27頁。
- 12 「神道宗教化の意義」、前掲、302頁。
- 13 「神道の新しい方向」、前掲、311-312頁。
- 14 「神道宗教化の意義」、前掲、302頁。
- 15 「神道の新しい方向」、前掲、311-312頁。
- 16 「神道宗教化の意義」、前掲、302頁。
- 17 同
- 18 安藤礼二は「『産霊』は、あらゆるものの生成の基盤となるような根源的な『一』」と述べている(安藤礼二『折口信夫』、講談社、2014年、364頁)。また本稿でも後半で折口が産霊神よりも根源的な神として「既存者」について語っていることに触れているが、安藤は「既存者」が戦後の一時期にしか語られていないことから、「折口信夫の根源神」として産霊を考えている(同、368頁)。「既存者」と「産霊」の二つを根源的な神の二つのペルソナと考えている点で重要な指摘である。

- 19 「神道宗教化の意義」、前掲、301頁。
- 20 同、303頁。
- 21 中沢新一はこう述べている。「ムスビ神は、神々が棲息することになる空間よりも前に形成される『前空間』に住んでいるのである」（中沢新一『古代から来た未来人 折口信夫』、ちくまプリマー新書、2008年、122頁）。折口のマレビトについての研究にくらべて、彼の産霊（ムスビ）神についての研究は著しく少ない。（西村亨編『増補版 折口信夫事典』大修館書店、1998年、623-708頁）。その中で中沢新一はいち早く折口における産霊神の重要性を指摘し、現代社会と結びつけた解釈に道を開いたと言える。
- 22 柳田國男「先祖の話」、『柳田國男全集13』、ちくま文庫、1990年、8-209頁。
- 23 「国文学の発生（第三稿）」、『折口信夫全集1』、中央公論社、1995年、13頁。
- 24 「民族史観における他界観念」、『折口信夫全集20』、中央公論社、1996年、47頁。
- 25 同、49頁。
- 26 「古代人の思考の基礎」、『折口信夫全集3』、中央公論社、1995年、404-406頁。
- 27 「神道の新しい方向」、前掲、312頁。
- 28 同、313頁。
- 29 「道徳の発生」、『折口信夫全集17』、中央公論社、1996年、401頁。
- 30 丸山眞男「歴史意識の『古層』」、『忠誠と反逆』、ちくま学芸文庫、1998年、365頁。
- 31 同、361頁。
- 32 「道徳の発生」、前掲、401頁。
- 33 同、402頁。
- 34 同、402-403頁。
- 35 同、401頁。
- 36 同、402頁。
- 37 同、403頁。
- 38 同。
- 39 同。
- 40 同。
- 41 罪と贖罪の考えについて、木村淳二は折口が敗戦の原因を罪を罰さない日本の神の在り方に求め、罪障観念をもたない神道の限界を乗り越えようとしていたと述べているが、これは大変重要な指摘である（木村淳二『折口信夫 -いきどほる心』講談社学術文庫、2016年、181-194頁）。折口が産霊神のみを根源的な神にできなかったのは、罪の問題があるからなのだ。